273
講談社現代新書

二十七度線

沖縄に照らされて

岡部伊都子

昭和二十年五月……。
一通の公報を残して、
岡部さんの婚約者は沖縄に散った。
「いつかは沖縄に行ってみたい、彼の死の真実が知りたい」
それが岡部さんの長年の願いであった。
そして渡った沖縄。
そこには死の真実を越えて、沖縄の真実がまっていた。
沖縄の人びとと知りあい、美に感動し、
悩み、苦しみ、教えられ、その心に、
沖縄に照らされて浮かびあがったものは何であったか。
本書は、心を裸にし、切々とつづった感銘をよぶ記録である。

二十七度線
定価——二四〇円　昭和四七年三月二八日第一刷発行
著者——岡部伊都子
©Itsuko Okabe 1972 Printed in Japan

発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一(大代表)　振替東京三九三〇
装幀者——杉浦康平＋辻修平
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
落丁本・乱丁本はおとりかえします

0295-156732-2253 (0)　(学1)

二十七度線

沖縄に照らされて

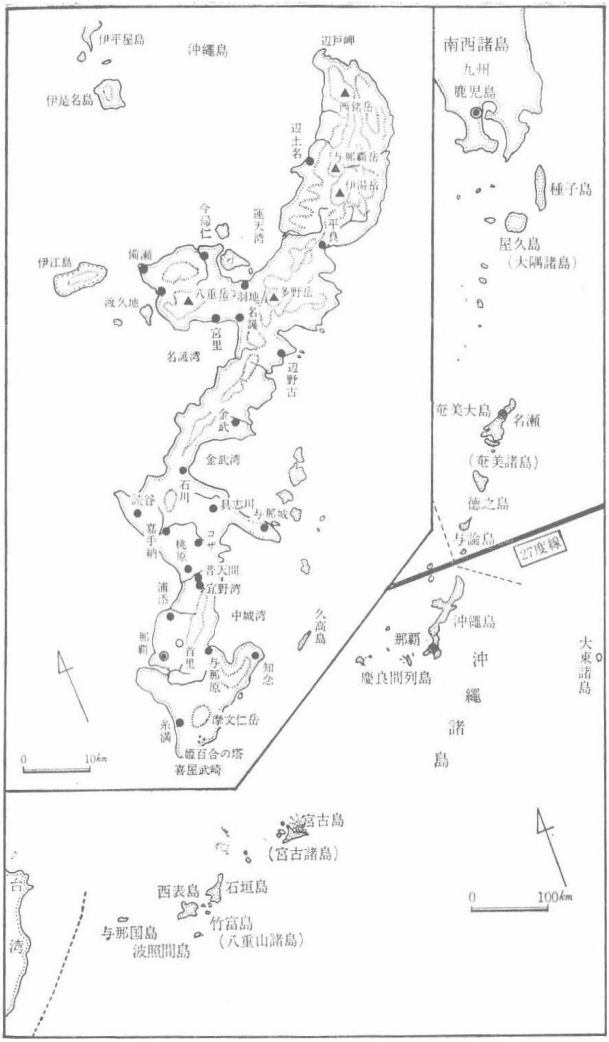
岡部伊都子

講談社現代新書

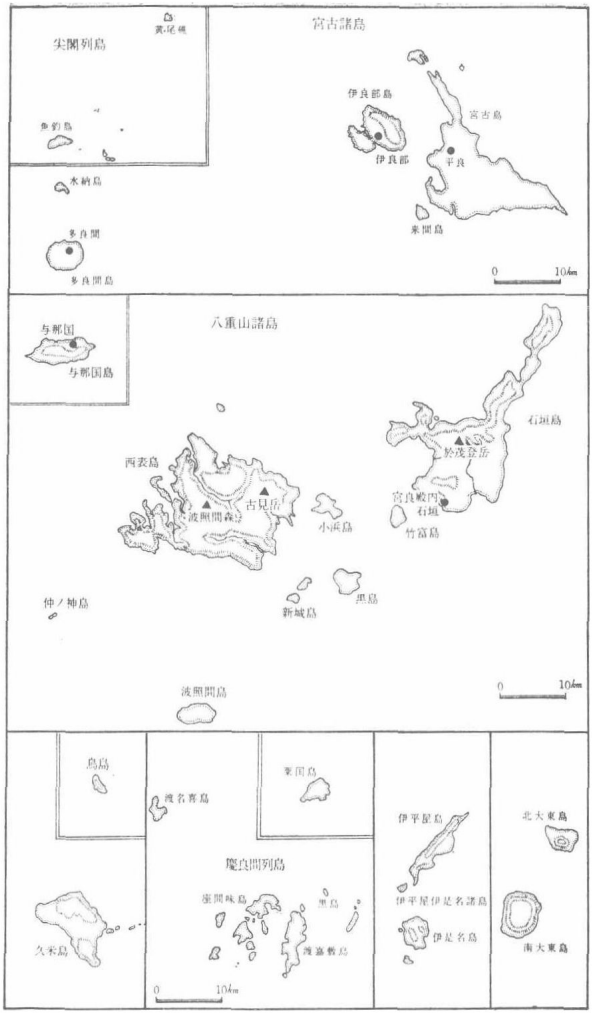
目次

二十七度線　7
白さざんか　91
土着のこころ　99
沖縄に照らされて　129

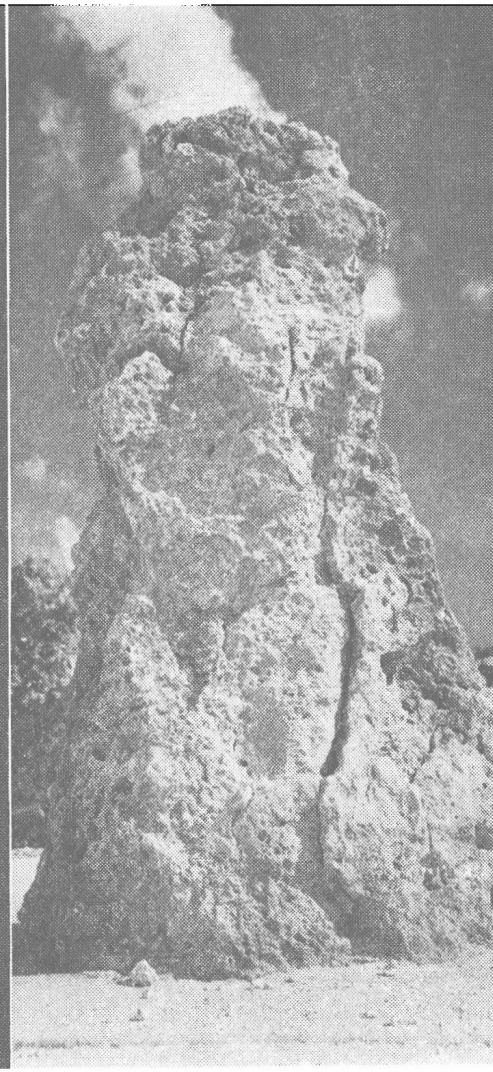
此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton


伊平屋島
沖縄島
辺戸岬
南西諸島
九州
鹿児島
伊是名島
西銘岳
辺土名
与那覇岳
伊湯岳
種子島
今帰仁
運天湾
平良
屋久島
（大隅諸島）
伊江島
備瀬
八重岳
羽地
多野岳
渡久地
名護
宮里
名護湾
辺野古
奄美大島
名瀬
（奄美諸島）
金武
金武湾
石川
徳之島
読谷
具志川
与那城
与論島
嘉手納
桃原
コザ
北谷
天川
宜野湾
浦添
中城湾
27度線
沖縄島
那覇
久高島
慶良間列島
沖
縄
諸
島
大東諸島
那覇
首里
与那原
知念
摩文仁岳
糸満
姫百合の塔
喜屋武崎
0
10km
宮古島
（宮古諸島）
台湾
西表島
石垣島
竹富島
（八重山諸島）
与那国島
波照間島
0
100km

南西諸島と沖縄島


尖閣列島
黄尾嶼
魚釣島
宮古諸島
伊良部島
宮古島
伊良部
平良
来間島
水納島
多良間
多良間島
0
10km
八重山諸島
与那国
与那国島
石垣島
於茂登岳
西表島
古見岳
波照間森
小浜島
宮良湾内
石垣
竹富島
黒島
新城島
仲ノ神島
波照間島
0
10km
鳥島
渡名喜島
粟国島
伊平屋島
北大東島
慶良間列島
座間味島
阿嘉島
伊平屋伊是名諸島
伊是名島
南大東島
久米島
0
10km

沖縄の島々



宮古島の人頭税石・この石と背たけをひきくらべて一律に課税したという――撮影・井上博道

1

一九四五年、五月。

それは、へんにはだざむい初夏であった。いつまでも冷え冷えした日がつづいて、えんどうもそらまめも不作といい、霜害、冷害が案じられていた。

三月十四日未明の空襲で、すでに災上したはずの、わたしの部屋であった。大阪西区立売堀。新一橋と、助右衛門橋とをみおろせる細長い家の三階の、わたしの部屋にストーブの火がもえていた。わたしは多分、机にむかっていたのだと思う。ふっと、部屋のドアをひらいて、紺絣のきものを着た青年がはいってきた。彼である。笑っている。

「あらっ、帰ってきたの……、いつ帰ってきたの。」

ひとことも口を利かずに、ただ、きれいな笑みを浮かべている彼の、匂うような若々しさが尾をひいて、目がさめた。

うれしい夢であった。彼が戻ってきたのだ。わたしの大好きな紺絣のきものを着て。否応なく外地へ送られる夜汽車の窓にみせていた、きれいな笑顔。たしかに、涙をあふれさせていた

と思うのに、くちもとだけは、きれいに笑っていたあの笑顔が、夢でみられたのだ。ほのぼのとしたなつかしさうれしさ。わたしは、母に夢を語った。

「よう夢でほんまのことをみはる人やさかい、きっと、ほんまに邦夫さんが帰ってきはるのかも知れませんな。」

まだ、三階の部屋で生活していたころ、姉の嫁ぎさきの弟さんの戦死を夢で知ったことがある。戦死の報がきた夢をみて、それを母に語っていたら、二、三日して姉から、そのとおりの報らせがあった。また、義兄の戦死も、やはり夢で知った。いつも、はっきりと、戦死の報をきく夢なので、邦夫さんが、なつかしいわたしの部屋に戻ってきた夢は、心をふくらませた。だが現実の沖縄は、戦争の修羅場である。アメリカ軍の上陸、空襲、砲撃。新聞やラジオのニュースは、どこかあいまいで、ほんとのところがわからない。最後に届いた手紙は、空襲がしきりで、壕にはいっている様子を伝えてきていたがその後、沖縄島周辺は、みっしり、敵艦隊にとりかこまれたようだ。

二年前の二月、あわただしく婚約の扇だけを納め合って出発した彼は、まもなく、黄塵の舞い上がる中国北部の状況をしらせてきていた。そして、七、八ヵ月前、思いがけなく沖縄に移ったという連絡があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

久しぶりに美しい緑に包まれています。もうここは同じ日本のうちです。

よろこびの声のきこえてくるような、はずんだ手紙であった。同じ日本のうちにまでかえってきた実感に、いっそう恋しさがあふれているように思えた。ところが、そのよろこびも束の間、本土各地は空襲で次々と焼かれ、沖縄はすさまじい決戦場になってしまったのだ。

幼いときからからだの弱かったわたしたち兄妹を、みとりつづけてきた母は、わたしが彼と婚約したあとで、喀血して寝込んでいた。それまでの母の労苦を思うと、わたしは、わたしがどういう形にもせよ、母をよろこばせることができるようになるまで、母の命が保たれるようにと、祈らずにはいられなかった。ありがたいことに、母は彼をたいそう気に入り、また、彼の母と大の仲好しになっていた。情感的なわたしの母にくらべると、彼の母はしっかりした乾いた気性の心のひろい人で、わたしの母は、時どき、彼の母に甘えていた。彼の母が、わたしをいたわり大切にすることは、わたしの母と同じであった。彼の母に、邦夫さんの帰ってきた夢を話してあげよう……。

だが、その夢は、ひと夜だけではなかった。その次の夜も、その次の夜も、同じ夢をみていた。あまりふしぎなので、わたしはその日をたしかめて、はっきりと記憶した。五月二十九日、三十日、三十一日の三夜であった。

敗戦後、半年たって彼の母にもたらされた公報には

陸軍少尉木村邦夫様には二十年五月三十一日沖縄本島島尻郡津嘉山に於て戦死。

と記されていた。

すでに公報で戦死を通達された人でも、思いがけない生還の伝えられることがあった。あるいは……、ひょっとしたら……と、心待ちしたが結局、婚約以来三年の歳月を経て、戦死と宣告されたのだ。それもやはり五月三十一日という日付……。思えば、はじめっから死の予感に貫かれていた婚約ではあった。わたしのもっとも敬愛していた次兄の博が、十七年一月十日マレー半島ジョホール州アイルベンバンで偵察飛行中に戦死した時は、まだ、緒戦の勝利に国中がわきたっていた。屍の収容もたしかで、白木の箱には白い骨がいっぱいつまっていたし、永禄二年の銘のある長船の軍刀もいっしょに焼けて、刀身だけが還ってきた。その後、急激に戦局は悪化し、生活事情もぐんぐんひっぱくしてきた。入隊後挨拶に訪れた彼とはじめて言葉をかわしたとき、「この人もまた戦死してしまうのか」と、愛惜の気持でいっぱいであった。清らかな気性を感じさせる人柄であった。小学校で一年先輩だった彼を、どこの何という男の子かも知らないまま、幼なごころに好意をもっていた。

「みすみす、死ににゆく人と約束せんでもいいやないの、おめでとうは言われへん。反対です

よ。」
急に集まってもらった親族会議では、反対意見の親戚が多かった。父も兄も姉もどう考えているのか、だまっていた。だが母は言った。
「このことだけは本人の思うようにさせてやってほしいのです。」
どちらが先に死ぬことになるやら、わたしも虚弱で母の心にはそのことが思われていたのかもしれない。卒業繰上げで入隊した彼は、久留米での教育から大阪に戻って、やがて外地へ出発することになった。外地へ出発する別れの挨拶が、婚約をうながす結果となった。だからほとんど、婚約者としてつき合う時間はなかった。それまでは父や母をまじえた座敷でのつき合いであった。
「いい部屋ですね。」
彼はわたしの部屋が気に入ったらしかった。こんなことなら、もっと早くから、わたしの部屋に通して、いろいろ話をしておくのであった。わたしは自分の好意を自覚するがゆえに、かえって遠く身を置いていた。わたしの客としては扱っていなかった。やっと、その自分への束縛をたちきり、婚約者としてふたりだけになったとき、別れは目前に迫っていた。
灯火管制でしずもる大阪駅の暗闇のなかに、見習士官ばかりをのせる列車が編成されてい

た。両親と兄妹と、わたしとわたしの両親とが、プラットホームで彼を見送った。二月の夜ふけ、夜目にも美しくこごめのような雪が、ふんぷんと散っていた。わたしは彼の母を前にたてようとしたが、彼の母は、わたしを大事そうに前へおしだした。

となりのプラットホームについた列車からは、白木の箱の列が降りてつづいた。ふるさとに還(かえ)ってきた戦死者の屍(かばね)。白木の箱の白い川のように流れ歩く風景は、これからいとしい者を送りだそうとする、こちらのプラットホームの者たちの心を刺(さ)した。人びとは、できるだけそこから目をそらすようにして、互いに「元気で」といい合うよりほか、言葉はなかった。

なんというおびただしい死者の数だろう。兄の白木の箱帰還の時は、一柱なのに何度も何度も公私の慰霊祭が行なわれ、たいへん手厚い迎えようであったのに、もう迎える人もない暗いプラットホームへ、こぼれるばかり多数の白木の箱があふれて、しかも、いやに静かであった。あの時、これが生きて相見る最後になることを、わたしは予感していた。思わず「死なないで」と言って涙を流した。彼が「こんな戦争では死にたくない」といった時にはびっくりして「どうしてそんなことをいうの」とたしなめた軍国乙女のわたしであったのに。わたしは、彼の思想を知らなかった。ただ彼の、卒直さと誠実さ、清潔さを信じたのであった。そして彼が死地に赴(おもむ)くのを、はげましこそすれ、とどめようとは思わなかったのだ。

「自分が戻ってくるまでは、他家に嫁がないという約束だと申していました。『自分にもしものことがあったときは、結婚してもらうように』と言いのこしてゆきました。いったんは、邦夫の心を生かせてもらったので、どんなにかおうちのご両親もご心配でしょう。こんどは、親孝行をしてあげてちょうだい。」

彼の母は、まっすぐな彼の気性からみて、わたしへのひとすじの思いのまま、きれいなからだで満足して死んだはずだと、いとおしそうに語った。そして毅然と私に結婚をすすめた。双方の家がともに罹災して、かつての状態ではなくなっていた。が、淡い短いつき合いであった彼のかわりに、その後の三年間、彼の母や家族とは、肉親にひとしい信頼関係がつくられていた。わたしの家の事情、とくに、父と母との気性のちがいを熟知した彼の母は、彼の死によって苦境にたったわたしの母の立場を案じた。

弱かったと思う。はずかしいと思う。先方に対しても失礼だったと思う。わたしはその後結婚して、満七年の歳月を、人の妻として暮した。その間に、父が死に、長兄の代になると同時に実家は破産した。実家が破産し、わたしがまるで結核のように、へんな咳をしはじめたために、人は、わたしの希望をいれて実家に戻した。お手伝いの若い女性と仲がよく、わたしは何の利用価値もない存在になっていた。子どもに目のないわたしだったのに、子も無かった。人

の顔色ばかりをみて暮した長年の懊悩に、すっかり疲れ果てて母のもとに戻ったわたしは、ただ、こんこんと眠った。

姉は、神戸の住吉の浜の持家に、母とわたしを住まわせてくれた。七年間の婚家生活があったとは、夢ではなかったかと思われるほど、母のそばで、わたしは小娘になった。たいそう強烈な個性をもつ人のそばにいたけれども、その人のものの考えかたは、全然といってよいほどわたしに染みてはいない。人に柔順に従いながら、結局、わたしは、わたしの精神をかえなかったのだ。それはわたしが、案外頑固な自分をもっていることを自覚させた。母と娘の、貧しい、しかし心豊かな日々のなかで、生活のためにと原稿を書く仕事がはじまった。からだが弱く、学歴をもたぬ中年の貧しい女として、やっと社会にでて働き、自活することができるようになったのだ。

神戸の港には、死んだ次兄の赴任を見送るために、家中でやってきたことがあった。兄は神戸の町が好きで、海岸通りに海産物問屋をいとなんでいた母方の伯父を慕って、よく神戸を訪れていた。母の養生先、羽衣からもよく見えた神戸大空襲の火に、伯父の家も焼けてしまったが、港を歩くと、そこここに、兄の足あとがのこっているように思われた。数え年二十四歳で逝った兄、二十五歳で散った彼。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton